

ドイツ中世の格言詩人 ヘルガーの心性

尾野 照 治

1. 伝承と詩作の時代

Die Heidelberger Liederhandschrift の C (以後写本 C とする) には、Spervogel の名のもとに、54 詩節が伝えられており、同名の写本の A (以後写本 A とする) には、Spervogel の名で 26 詩節、それに続いて der Junge Spervogel の名で、27 詩節が伝えられている。研究者達の詳細な研究によって、写本 A と写本 C の 1～11 の詩節、および写本 C の 47～53 の詩節は、Spervogel の作と断定されている。これは Minnesangs Frühling (以後 MF とする) の 20, 1～24, 16 に対応する。同じ調べをもつ Spervogel の他の詩節は、Jenaer Liederhandschrift に伝えられており、それは MF 24, 17～25, 12 に相応する。Spervogel の詩節とは異なった、もう一つの大きな調べによる詩節、つまり写本 A と写本 C の 12～26 と、写本 A の 41～53 (これは写本 C の 34～46 に対応) とは、Herger の作とされている。これは MF 25, 13～30, 33 に相応する。異論はあるけれども、この場合も詳細な研究の結果、ほぼ Herger の作と認められている。

Spervogel に属する詩節群と、Herger に属する詩節群とは、形式（とりわけ韻律と構成）の点でも内容の点でも、互いに大きく異なっている。特に内容の面で、Herger に見られる動物寓話や宗教テーマの詩が、

Spervogel には見られない。更に Herger は、歴史上の実在人物の名を詩中に挙げるが、Spervogel はそれを挙げない。他方、Spervogel の詩に見られる宮廷的要素は、Herger の詩には感じられない。このような事実から、Herger の詩の方が、Spervogel のそれよりも古風であり、従って前者の方が後者よりも年上であると思われる。

詩人 Herger の生没年や、それぞれの詩作の年月は伝わっていない。従って、詩作の時期を決定するには、詩人が仕えた主君達の経歴を参考にして、その活躍した年代を推定せざるを得ない。後で考察する詩節の中に、von Hüsen Walther, Heinrich von Gebechenstein, von Stoufen noch ein, Wernhart von Steinesberc という彼の後援者の名前が挙げられる。von Hüsen Walther は、当時の有名な詩人 Friedrich von Hausen の父親で、1173 年までの生活記録の一部が、珍しく残されている。そこから Herger が、1173 年頃にその宮廷で詩作をしていたことが推定される。他の後援者達については、年代の推定ができるだけの資料は残っていないが、彼らの宮廷（住居）の場所から推して、Herger は、中部ライン地方およびバイエルンのドナウ河流域地方で、活動していたことがわかる。この詩人の名前 Herger は、MF 26, 21 を、詩人が自分自身を名乗った詩行だと理解するところに由来する。そして MF 25, 13～30, 33 に納められている同一の調べの 38 詩節は、すべて Herger が詩作したと推定されている。一般に、当時の詩人達のほとんどは、具体的な生活記録がないために、推測の上に推測を重ねて研究が進められる。いわば状況証拠を固めていく方法である。これは危うい研究方法であるが、事の性質上やむを得ない。

2. 表現方法と詩節の構成

Herger は、貴族出身ではない職業歌人である。各地の宮廷に滞在して

は、詩作朗唱による奉仕を行うことが生業であった。宮廷の聴衆の前で、寓話、民衆言葉で書かれた宗教文学、まだ文学にまで成熟していない稚拙な格言詩の知識等を前提にして、朗々と歌った。その際、遍歴歌人としての自分の窮迫した状況を、詩の中に痛々しく読み込み、それに応えようとしない主君への批判を、婉曲な表現を用いて歌にした。迂言的な表現方法として、自分自身の名をまるで第三者のそのように扱ったり、仮空の対話の相手を詩中に登場させる。あるいは、諺や寓話によって権威付けをしたり、幾人かの殿方の生き方を、それとなく比較する方法を用いたりした。現在から見れば、特に注目されるような手法ではないが、当時としては画期的な表現法であったと思われる。先駆者の偉業はどれも、後世から見れば少なからず稚拙に感じられるものである。

中世の多くの詩人達の作品が、本来の順序をとどめず、しかもあちこちに散らばって伝えられているなかで、Herger の場合には、自分で行なったと思われる作品の配列と区分が、運よくそのまま保たれているようだ。彼の詩は、Kürenberg らの詩とは異なって、個々の詩節がそれだけで完結し、独立しているといった性格のものではない。彼は作品を、テーマと形式に従って、6つの Zyklus (ツィークルス) に区分する。5つの詩節がセットになって、Pentade (ペンターデ) というツィークルスを構成し、3つの詩節がセットになって、Triade (トリアーデ) というツィークルスを構成する。詩人は、全体の 28 詩節を、5つのペンターデと1つのトリアーデによって、合計6つのツィークルスにまとめている。29 番目の詩節だけは例外で、後に説明を要す。

3. 第1 ペンターデ

Ich sage iu, lieben süne mîn,

iu enwáhset korn noch der wín,
ich enkán iu niht gezeigen
diu lêhen noch diu eigen.
nu genâde iu got der guote,
und gebe iu sælde unde heil.
vil wol gelanc von Tenemarke Fruote.

(MF 25, 13–25, 19)

《愛しい息子達よ、お前達に告げておく。お前達には、穀物もぶどうも成長しない。封土も財産も、お前達に相続させられるものはない。さあ、慈悲深き神が、お前達に恵みを垂れて下さいますように、そして幸福と幸運を、お与え下さいますように。デンマークのフルオト殿の場合には、実に幸せにいったものだ。》

第1のペンターデは、MF 25, 13から26, 12までの5つの詩節から成る。詩人はこのペンターデにおいて、自分の後援者達の死を深く悼む。その後援者達は、この詩節で名の挙げられている Fruot von Tenemarke と密接に関係づけられる。Fruot は、中世ドイツ文学でしばしば、物惜しみしない心をもつ殿様の模範として、その名が挙げられるからである。この詩節は、詩行に漲る力と、詩人が選び取った語から、何やら緊迫した状況のもとに歌われたようである。一般に豊かな父親なら、穀物畑やぶどう畑など、息子に相続させられるものを、少なからず所有しているものである。しかしこの詩人は、ライン河中流域を放浪していた貧しい歌人ゆえ、愛する息子達に相続させるものを所有していない。殿様が臣下に貸し与える封土 (lêhen) も、家屋敷 (eigen) も、何ひとつ財産がない。悲しいことに、どこからどこまでが相続できる土地であるとか、いずれが相続できる家屋敷であるとかを、息子達に示すことさえできない。赤貧の吟遊詩人が

放つ、苦衷の言葉である。かくなる上は、もはや慈悲深い神様に頼るしかない。神から地上での幸運（heil）を賜り、魂が天上へと救われる（sælde）ように、神に愛される生活をせよと、詩人は口を極めて息子達に説く。重苦しい説教に確実な説得力を与えようと、最後の行が挿入された。デンマークの歴史を叙述した Saxo Grammaticus（1150－1220）によれば、同国の王 Fruot は、無一文から莫大な財を築き、王としての名声が頗る高かった。冒険を求めて宝探しに出かけ、怪獣を打ち殺して念願の財宝を獲得する。しかし、それを個人の隠し財産とするのではなくて、惜しむことなく人々にそれを分かち与える。それゆえ、「黄金を挽く臼を所有している、気前よさの原型と言うべき王」だと称される。親の子に対する願いは、いつの時代も変わらぬもの。この幸運な王フルオトにあやかって、詩人も息子達に、裸一貫から財を築き、幸運を獲得してほしいと強く願う詩節である。

Mich riuwet Fruot von über mer,
und von Hûsen Walther,
Heinrich von Gebechenstein,
und von Stoufen noch ein.
got gnâde Wernharte,
der ûf Steinesberc saz
und niht vor den êren versparte.

(MF 25, 20－25, 26)

《私がその死を悼む人は、海の彼方のフルオト様、フーゼンのヴァルター殿、ゲベヒェンスタインのハインリーヒ殿。そしてもう一人のハインリーヒ殿は、ストウフェンのお方である。神はヴェルンハルト殿に、お恵みを垂れて下さいますように。この殿はスタイネスベルクに住まえるお方で、

名誉のためには何も惜しむことがなかった。》

Herger の格言詩は、12 世紀後半の格言詩のレパートリーが、どのようなものであるのかを実例をもって教えてくれる。後援者である殿をほめ讃えること、あるいは施与を惜しむ吝嗇の殿を貶すこと、遍歴歌人の窮状の説明、またはそれを訴えること、動物寓話や諺・格言からの教訓、暮らし方のルール、宗教的な事柄等。この詩節は、かつての主君を哀悼し、称讃する歌のレパートリーに属す。詩人のパトロンとも言うべき殿方の名前を並べて、生前に詩人をよく保護してくれたことに感謝しつつ、立派な殿方を偲ぶ。デンマークの王フルオトは、既に前の詩節で採り上げられた。ヴァルターは、後世の有名な詩人フリードリヒ・フォン・ハウゼンの父親である。先に挙げられるハインリーヒは、あるいは後世の名声高き詩人ブルクグラフ・フォン・レーゲンスブルクの父親であろうか。次に名を挙げられる同名のハインリーヒは、シュタウフェン王家の王のひとりだと言われている。放浪の身である吟遊詩人は、衣・食・住のすべてを与えてもらわなければ、到底生活できない。住については、ヴァルターの出身地名 Hûsen (=Haus 家) が、そのシンボルとなる。衣については、前のハインリーヒの出身地名 Gebechenstein の Gebe (=Gabe 施し) が、一目瞭然とは言えないながらも、それを暗示している。食については、後のハインリーヒの出身地名 Stoufen (=Stauf 盃) が、それを象徴的に表わす。研究者が指摘する通りに、これが真に詩人の意図したものであるなら、全く舌を巻かざるを得ないほどの詩的技巧である。ヴェルンハルトは、最近亡くなった慈愛深い殿様で、詩人はこの殿に、格別に世話になったという。物惜しみせず施しのできる殿方は、否が応でも名望が高まる。êre (名望) は、中世の最高の徳操の一つである。

Wer sol ûf Steinesberc
würken Wernhartes werc ?
hei wie er gab unde lêch !
des er dem biderben man verzêch,
des enmôhte er niht gewinnen.
daz was der wille : kom diu state,
si schieden sich ze jungist mit minnen.

(MF 25, 27-25, 33)

《ヴェルンハルト殿の慈悲深き行いを、スタイネスベルクで一体誰が行なえようか。ああ、殿はなんと気前よく施し与え、また貸し与えたことか。殿が立派な人に与えないでおいたものは、もともと殿が自分のものにできなかったものである。つまり、すべてを施し与えることが、殿の変わらぬ心であった。それゆえ潮時になったとき、恩恵にあずかる者らは、殿を愛しつつ最後に立ち去ったのだ。》

Herger は、ヴェルンハルトの死を、特別に深く悲しみ悼んでいる。殿の秀でた人柄を、この詩節と次の詩節で、大いにほめ讃えるところからも、それは明らかになる。その立派さは、Nibelungenlied 中の Rüedeger von Bechelâren のそれにも匹敵すると言ってよい。心をこめて詩人の世話をしたヴェルンハルト殿は、多くの吟遊詩人達の保護者になっていた。食物や衣類 (<gab) は、困らないだけのものを施し、住居 (<lêch) も惜しむことなく貸し与えた。気前良さの点で欠ける所のないこの殿は、頼って来る者が立派な人であれば、必ず喜んでもらえるだけのものを施し与えた。もし施すことができなかったとするならば、それはもともと殿が、自分のものとして所有していなかったものである。自分が所有しているものは、満足してもらえるだけのものを、与えないではいられない。その施

しの心は、まさしく理想的である。

殿の城に寄寓する歌人達は、たとえ妬みをもつような性向の人でさえも、最後には殿を愛さないではいられない。殿に深く感謝しながら、満ち足りた気持ちを抱いて、城を去って行った。詩人は、宮廷での美しい思い出を懐かしみながら、息子に満足そうに語っている。ひょっとしたらこの息子も、自分と同じ遍歴歌人になるのではないだろうか。そのことを相当に確信しているかのように、滔々と歌っている詩節である。

Dô der guote Wernhart
an dise werlt geborn wart,
do begonde er teilen al sin guot.
do gewan er Rüedegêres muot,
der saz ze Bechelæren
und pflac der marke mangan tac:
der wart von siner frûmekeit sô mære.

MF (25, 34-26, 5)

《立派なヴェルンハルト殿は、この世に生を享けると、自分の財産をすべて分かち与えた。彼が得た気性は、ベヒェラーレンに住んで、長い間国境を守護したリュエデゲール殿のそれであった。彼はその人徳のために、かくも名を知られた人である。》

前節と同様にこの詩節もまた、スタイネスベルクのヴェルンハルト殿を称讃する歌である。詩人を保護し後援してくれたヴェルンハルト殿は、生まれながらにして気前よく、人に満足してもらえる施しをする性質を備えていた。それはちょうど、英雄叙事詩 *Nibelungenlied* に登場する、徳操高き英雄リュエデゲールの性質と同一である。彼はフン族の王アッティラ

の優れた下臣であり、ブルグンド族の王グンテルの弟に娘を嫁がせた。リュエデゲール殿の徳操の高さが、両族の大きな信頼を獲得したものである。ベヒュラーレンにある彼の城を訪れる者は、誰でも十分なもてなしにあずかり、多くの施しを得ることができた。彼の名は、厚き信望と気前よさの代名詞として語り継がれている。しかし、ひとたび両族が相争うことになる、彼はその高き徳操のゆえに、忠と孝の板ばさみに陥り、心を苦しめながら自害同然の死を選ぶ。ドイツの民衆の誰もが伝え聞く英雄伝説の中から、ヴェルンハルトと同じ有徳の英傑を選び取ったところに、フランスの影響が及ぶ以前の、古武士風の詩の雰囲気の色濃く漂っている。

Steinesberc die tugende hât
 daz ez sich nieman erben lât,
 wan einen der ouch êren pfligt.
 dem strite hât ez an gesigt :
 nû hât ez einen erben.
 der werden Ætingære stam
 der wil im sinen namen niht verderben.

(MF 26, 6-26, 12)

《スタイネスベルクは、名誉をも大事にする人以外には、誰にもその跡を継がせないほどの、諸々の徳を備えている国である。この国は、後継争いに勝利した。というのは、今では世継ぎをもっているからだ。エッティンゲンに住まう立派な人々の末裔は、スタイネスベルクの名を傷つけることはない。》

前の詩節と同様にこの詩節もまた、ヴェルンハルト殿に対する称讃の歌である。スタイネスベルクは、ヴェルツブルク近郊にある優れた国である。

この国全体の徳の高さゆえに、その世継ぎは、世の人々から広く尊敬をうけ、名望高き立派な人でなければならぬ。いずこの国でもそうであるように、この国でも大きな後継争いが起こった。しかし、ヴェルンハルト殿のような高傑な人物が、この国の後継者に選ばれたので、その争いに勝利したと言える。エッティンゲンは、現在のパッサウとザルツブルクの間に位置しており、その地の優れた末裔とは、無論ヴェルンハルト殿のことである。彼が跡継ぎとなったからには、もはやスタイネスベルクの名を汚すことは決してない。殿に全幅の信頼を置いていることを、特別に強調する表現である。Steinesberg-Pentadeと称されるこれら5つの詩節は、他のツィークルスとは趣を異にする。因みに、歴史上の実在人物の名が挙げられるのは、このツィークルスのみである。

4. 第2 ペンターデ

Wan seit ze hove mære,
wie gescheiden wæren
Kerlinc und Gebehart.
si liegent, sem mir mîn bart.
zwên bruoder die gezürnent
und underziunent den hof,
si lânt iedoch die stigelen unverdûrnet.

(MF 26, 13–26, 19)

《ケルリンクとゲベハルトが、どれほどかけ離れた存在であるかを、宮廷では噂している。誓って言うが、宮廷の人々は間違ったことを言っている。互いに腹を立てあい、宮廷の中に垣根の仕切りを作る二人の兄弟でも、その垣根を越えられる脚立を、茨の生け垣に隠しはしない。》

第2のペンターデは、MF 26, 13から27, 12までの5詩節から成る。このツィークルスでは、吝嗇の殿と、遍歴歌人の生活の厳しさが、テーマとして扱われる。吟遊詩人は、一般に身分が低く経済的に困窮しているため、奉仕する殿からの施しをあてにせざるを得ない。それゆえ詩人は自嘲気味に、吟遊詩人のことを、身分の低い者や貧しい者に用いる語 Karl, Kerl を用いて、Kerlinc と呼ぶ。他方、一般に殿様は、吟遊詩人達が他の土地でも自分のことを称讃してくれるように、彼らに気前よく施しをする。施与によって名望を高めようとする殿様を、施しを与える (geben) の意から、Gebehart と呼ぶ。しかし両者の身分には、天と地ほどの差がある。そのため宮廷の人々は、吟遊詩人達のことを、殿の足元にも近づけぬほど身分卑しい輩だと、いかにも見下したことを囁きあっている。しかし、そのような噂を広めることは、大きな間違いである。なるほど殿と詩人達の身分の差は、月とスッポンほどに大きい、その殿も、もっと大きな名誉を得るためには、詩人達に負うところが多いではないか。詩人達が他の国へ移って行ってからも、殿の立派さを当地で、十分に噂してもらいたいのである。従って殿とおかかえ詩人は、歌という芸事によって、いわば兄弟の関係にあると言ってよい。兄弟ならば、どんなに激しく憎しみあうことがあっても、あるいは顔も見たくないと言って、屋敷の中に垣根の仕切りを作っても、互いを完全に追いつめてしまうようなことをしてはならぬ。「窮鼠猫を噛む」の譬えもあるように、互いを徹底的に追いつめるようなことをせず、いつでも和解できるように、少なくとも最後の一本の道だけは残しておくのが、人の分別というもの。詩人と殿の関係を、宮廷の兄弟の関係に見立てて、少しは情をかけてほしいと殿に哀願している詩節である。

Mich müet daz alter sêre,

wan ez Hergère
alle sine kraft benam.
ez sol der gransprunge man
bedenken sich enzite,
swenn er ze hove werde leit,
daz er ze gwissen herbergen rite.

(MF 26, 20-26, 26)

《老令は、痛く私を苦しめる。というのはこの老令が、ヘルゲールから力をすべて奪い取ったからだ。ひげが生えそめた若者は、手遅れにならないうちによく考えてみよ。宮廷で厄介者になるようなら、確かな宿へ赴くことを。》

この詩節は、詩人ヘルガーが、敢えて自分の名を挙げて、息子達に人生訓を垂れる教訓詩になっている。詩人自ら省察するに、高令となった自分には、いまだに衣食住の完全な保証がない。今さら人生をやり直すこともできず、そのため不安定な身分のままに、寂しく死を待つほかはない。息子達は、ちょうどひげが生え始めたばかりで、まだ十分に若く、将来性がある。しかし、その若さの上にあぐらをかいて、無為無策の生活をしていると、取り返しのつかないことになる。宮廷で、殿や貴族達からあきられ、辛くあたられるようになったら、まごつくことなく転身をはかるがよい。そのときには、自分を歌人として十分に評価してくれる所、即ち衣食住に不自由することのない、好意的な宮廷に移らねばならぬ。心の機微に鋭敏であれ。潮時を逸することなく転身をはかるがよい。父のように老令になってからでは、もはやどうすることもできない。確かな宿は、宮廷に寄寓することよりも、むしろ自分の持家である。宮廷で嫌がられるようになったら、確かに自分の所有とされている持家にもどれるように、若い時

から十分に配慮した人生を送らねばならぬ。父自身が寄る辺なき身の上であることと、人生のほどよい頃に家をもてるよう配慮してこなかった浅はかさを、悲しく嘆く詩節である。現代の我々も共感しうる、時代を超えた詩である。

Wie sich der riche betraget !
sô dem nôthaften waget
dur daz lant der stegereif.
daz ich ze bûwe niht engreif,
dô mir begonde entspringen
von alrêrste mîn bart !
des muoz ich nû mit arbeiten ringen.

(MF 26, 27 - 26, 33)

《高貴なお方は、なんとすばらしい暮らしをしていることか。それに対して貧困な者の鎧は、国中を揺れ続ける。ひげが生えそめたとき、私が家を建てなかったことは嘆かわしい。それゆえ私は今、あれこれの苦しみと戦わなければならないのだ。》

蟻とキリギリスの話を想起させる詩節である。詩人の廻りの高貴な人々は、幸せなことに皆自分の家を持っている。熟慮した人生設計のもとに、着実な暮らしをしている。それに対して、貧しさに苦しんでいる吟遊詩人達は、若い頃から賢明な人生設計をしてこなかった。そのために、今だに定住できる自分の家を所有しておらず、国から国へ、宮廷から宮廷へと、馬に乗って放浪の旅を続けなければならぬ。鞍から垂れ下がっている鎧が、一時も静止することはなく、それが揺れ続けている様子は、吟遊詩人の不安定な生活の揺れを象徴する。若い頃から施与を蕩尽せずに蓄えるか、あ

るいは小さな家でももらっておくべきであった。そうすれば、家のまわりの畑も耕せて、安定した生活を営めたであろうに。後悔先に立たずの言葉は、意義深い格言として、人々の心に掛かっていた。ひげが生えそめた若い頃に、自分の家を所有できなかったら、生涯にわたって不安定な生活を余儀なくされる。吟遊詩人である父は、自分のこれまでの人生を深く反省し、息子達を前にして教訓を垂れる。高令になった自分が今、様々な苦しみと戦わなければならない渦中にいるだけに、息子達に与える教訓の言葉は、極めて重い力をもつ。父親から息子に与える一章の体裁をとって、遍歴歌人の苦しい内情を暴露し、殿様から同情と施しを引き出そうとする。当時の職業詩人の生活の実情が、はっきりと映し出される詩節である。

Weistu wie der igel sprach ?

'vil guot ist eigen gemach.'

zimber ein hûs, Kerlinc.

dar inne schaffe diniu dinc.

die hêrren sint erarget.

swer dâ heime niht enhât,

wie manger guoter dinge der darbet !

(MF 26, 34-27, 5)

《針鼠がなんと言ったか、あなたは御存知ですか。「自分の持家はとてもすばらしい」と言ったのですよ。だからケルリンクよ、家を建てなさい。その家の中で、自分のなすべきことをしなさい。しかし殿様方は、けちになってしまわれた。故郷に何も所有していない人は、なんと多くのすばらしきものを持っていないことか。》

寓話の引用から始まり、自分の家をもつことがどれほど重要であるかを、

あらためて強調する詩節である。漂泊の歌人にとって、自分の家をもつことが、どれほどむづかしいことか。またそれゆえに、持家にどれほど強く憧れるかを、重々しく表白している。寓話の中で、針鼠は狐から、夜警になるように勧められたが、それをきっぱりと断った。他人に伺候して、媚びへつらいながら不本意に生きていくよりは、小さくて汚ないながらも自分の家で、好き勝手に暮らす方がよいからだ。自分の家は、最高に自由な天国と言える。このように、針鼠でさえも家をもつことを勧めているのだから、持家ほど人の心を安定させ、幸せにするものは他にないのだ。だからケルリンクよ、是が非でも自分の家を持ちなさい。自分の家を建てて、そこで自分のしたいこと、あるいはすべきことをしながら、思いのままに暮らすのがよい。しかし、当時の吟遊詩人達に多くの蓄えがあるはずはなく、家をもてるかどうかは、ひとえに殿様の施し次第であった。それなのにこの頃の殿様は、貴人としての徳操に欠け、すっかり吝嗇になってしまっているのです。彼らに頼ったところで、とても家など建ててもらえるはずがない。自分の心を最も安めることのできるのは、結局のところ故郷である。その故郷に、自分の土地や家屋敷を所有していない人は、人生で享受できるはずの多くの素晴らしきものを、全く持たないままに一生を終えることになる。さめざめと涙を流しながら語る詩人の姿を、眼前に思い浮かべるのに困難はない。第2 ペンターデの第1 詩節の内容が、今またここで具体化される。ツィークルスを形成するのにふさわしい詩節配分である。

Swie daz weter tüeje,
der gast sol wesen früeje.
der wirt hât truckenen fuoz
vil dicke, sô der gast muoz
die herberge rûmen.

swer alter welle wesen wirt,

der sol sich in der jugende niht sūmen.

(MF 27, 6-27, 12)

《天候がどうなろうと、宿を借りた者は早起きしなければならない。宿借りが館を出ていかねばならなくても、館の主人はひじょうにしばしば、乾いた足を持っている。だれでも年をとってから家の主人でいたいのなら、若いときに迷っていてはならぬ。》

前の詩節と同様に、家をもつことの大切さを、諄々と説いた詩節である。よその土地からやって来て宿を借りた者は、翌朝雨が降ってしようが、嵐が吹きすさんでしようが、遠慮がちに早起きし、早く出発しなければならない。手や足のみならず体中がずぶ濡れになろうとも、そこが自分の家でない限り、さっさと出ていかねばならぬ。それとは反対に、家の主人は自分の家にいる限り、誰にも気を使う必要はなく、どしゃ降りの朝、家から出て行く義務もない。足を濡らさないで、心安んじて快適に暮らすことができる。家を持っている人とそうでない人とでは、二人の間に雲泥の差がある。老令になったときに自分の家の主人でありたい人は、若い時から絶えずそのことを意識して、無為に日々を過ごすことのないように、十分に心しなければならぬ。まだ老令福祉年金制度のないこの時代、老後の生活設計は早すぎることはなかった。

5. 第3 ペンターデ

Ez was ein wolf grāwe

unde ein man alwāre.

die liute wolten slāfen.

er lie den wolf zen schäfen.
do begienc er in der stige
daz man in des morgens hienc
und iemer mê sin künne ane schriet.

(MF 27, 13–27, 19)

《その昔、一匹の灰色狼と、ひとりの愚かな男がいた。人々は眠ろうとした。愚かな男はその狼を、羊の群れの中に入れた。すると狼は柵の中で凶行に及び、そのかどで朝方ぶら下げられた。今後ずっと狼族は、仇として悪しざまに罵られよう。》

第3ペンターデは、MF 27, 13から28, 12までの5詩節から成る。その題材を、主に寓話から採用した格言詩群である。この詩節では、愚かな判断による安易な解決法が、どのように悲惨な結果を招くかを、教え諭している。昔々、年老いた狼と愚かな人間がいた。毛の色が灰色になるほどの老狼は、経験も豊富で、知識も広く深いものがある。中世のこの当時、城壁に囲まれた町の外は、すぐ近くまで森が迫り、数多くの狼がそこに住んでいた。夜ともなると、狼の遠吠えが悪魔の叫びのように、暗い夜空に響き渡る。油やろうそくは貴重品だから、通常は用いられず、そのために月の見えない夜は、闇一色の町になった。森の中の狼達は空腹を訴えて、夜中遠吠えをする。その鳴き声にふるえながら、人々は冷たい寝床にもぐりこむ。そのとき愚かな者は、狼をおとなしくさせる方法を考えついた。羊を与えて満腹させれば、やかましい遠吠えをしなくなるであろう。老獺な狼とて、空腹のときに大好物を目の前にすれば、身の危険をかえりみる暇もなく襲いかかる。その結果、人々の重要な家畜を食い殺したかどで、老狼は打ち殺され、森の狼達に見える所に、見せしめとしてぶら下げられた。それ以後ずっと、狼達は人々の仇として、悪しざまに罵られる運命をにな

う。愚かさは、まわりのあらゆるものを巻き添えにする。愚かさが大きな犠牲を伴うのは、古今東西の変わりなき真理である。このイソップ風の動物寓話は、格言詩の古いタイプに属する。それゆえにこの詩節からも、Herger が、古い格言詩の大家であることが明白になる。但し、Herger がこれらの寓話を、どの程度までアクチュアルな社会問題の、あるいは人生問題の暗示として用いたのかは、まだ明らかにされていない。

Ein wolf unde ein witzic man
sazten schächzabel an :
si wurden spilnde umbe guot.
der wolf begonde sinen muot
nâch sinem vater wenden.
dô kom ein wider dar gegân :
dô gab er beidiu roch umb einen venden.

(MF 27, 20 – 27, 26)

《一匹の狼と一人のずる賢い男が、将棋を始めた。彼らは賭け将棋を行なったのだ。狼は父祖に倣って、気持を昂揚させた。すると一匹の雄羊が歩いて来た。そのとき狼は、一つの歩を得て、二つの飛車角を失った。》

前の詩節では、愚かな男が狼に対して、馬鹿な行動に走ったが、この詩節では、抜け目のない男が狼に対して、ずるい行為に及ぶ。どれほど強そうに見える者でも、必ずどこかに弱点がある。賢い人は、そのアキレス腱が見える瞬間を見事にとらえて、勝ちを制する。いかにも強そうな狼と、ひ弱そうだが狼よりも賢い男とが、金品を賭けて将棋を始めた。賞金や獲物が眼前に置かれると、血は争えないもの。狼は、かつて父祖らがそうしたのと全く同じように、興奮しはじめる。「瓜の蔓に茄子はならぬ」の譬

え通り。気持が昂揚し、血が頭に昇ったところに、大好物の雄羊が向こうからやって来る。狼の本性からすれば、当然ながらもはや我慢できない。血が逆流し、矢も楯もたまらず、そちらの方に眼が移る。知らず知らずのうちに、よだれが垂れる。将棋への集中力がすっかり散漫になり、意識と本能とが完全に分離した存在になった。悲しいかな、それが理性のない獣の性であり、弱点である。無論、人間でもこの種の、理性の弱い浅はかな人があるもので、またその弱点をとらえるに敏なる敵も、必ずどこかにいるものだ。ものの見事にこの瞬間をとらえて、勝利を不動のものとする賢い人である。瞬時でも分別を失って、本能の赴くままに行動すれば、必ずや失敗するという忠告の詩節である。

Ein wolf sine sünde flôch,
in ein klôster er sich zôch,
er wolde geistlichen leben.
dô hiez man in der schâfe pflegen :
sit wart er unstæte.
dô beiz er schâf unde swin :
er jach daz ez des pfaffen rûde tæte.

(MF 27, 27 - 27, 33)

《狼が自分の罪をのがれて、僧院に入り、聖職者の生活をしようとした。そのとき狼は、羊の番をするように命じられた。その後、心変わりした。狼は羊と豚をかみ殺し、そして言った。「そんな事をしでかしたのは、坊さんの犬ですよ!」》

狼の名を借りて説いているが、実は人間の本性を鋭くとらえた詩節である。血を流す獰猛な狼が、罪をのがれるために僧院に入ったというのは、

神への献身に値しない墮落した人々が、キリスト教に逃げ場を求めて来たということの意味する。乱れた世の中を、厳しく批判した言葉である。蛙や兎が人間のように振る舞い、仏門に逃げ場を求める様子を描いた、鳥羽僧正の鳥獣人物戯画を想起させる。中世のこの当時、特にシトー派の宣教師達は、布教のために、そして勤労を奨励し貧者を救済するために、現在のハンガリーやチェコが位置する東方に向かい、布教と開拓を一体の事業として進めた。そのとき、博愛ともてなしの象徴となるワインを醸造するために、ぶどう園を栽培し、牧畜によって良質のたんぱく源を得た。狼が羊の番を命じられたとあるのは、当時の牧畜がその背景にあり、更にそれは、修道院の修道士達が、それぞれの仕事をあてがわれたことをも証している。羊を眼前にすれば、気持がそちらに移るのは狼の本性。信仰への決意が揺らぎ、牙をむいて羊と豚をかみ殺した。ひとたび本性がむき出しになれば、真赤な嘘も平気でつける。羊と豚を襲ったのは、この私ではなくて、坊主が大切に飼っている犬であると。つまるところ、本性から脱げ出ることができず、再び罪ある生活にもどっていく。当時の pfaffe は、münche とは著るしく異なる。münche の多くは、教会に職を見つめることができずに、放浪僧となった者達で、清貧の生活を送り、厳しい修行を自らに課する修道僧である。他方 pfaffe は、教区を任された豊かな世俗僧で、結婚式や葬式などによって多くの収入が得られる。それゆえ、幾匹もの猟犬を飼うことができるし、それらの猟犬を連れて狩猟も行っていた。豊かな世俗僧に対する批判も感じられるが、詩節全体では、どれほど崇高なものに憧れて、そこに至ろうとしても、生きものはそれぞれ特有の性をもっており、おのずと限界があるということを説いている。人間の本性も例外ではない。

'Ez mac der man sô vil vertragen.'

hôrte ich Kerlingen sagen,
'daz man in deste wirs hât.'
sô wirt sîn sus vil guot rât,
ist er widersæze.
zwên hunde striten umbe ein bein :
dô truog ez hin ze jungest der ræze.

(MF 27, 34-28, 5)

《「その男は、とても多くのものに耐えられるので、それだけ一層つらいめにあうのだ」とケルリンクが言うのを、私は聞いた。その男は、もし反抗できる力があるなら、確かに救われるであろうに。二匹の犬が、一本の骨を取り合いした。しかし最後には、よく咬みつく犬の方がその骨をさらっていった。》

人の性は恐ろしいもの。相手が弱虫だとわかると見くびって、寄ってたかっていじめぬく。だから相手が強くとも、とことん反抗するのが得策だ、とケルリンクは忠告する。たとえば人からひどい目にあわされても、それをじっと耐え忍ぶ男がいる。その男が反撃に出てこないと見てとると、相手はもっといじめにかかる。このような虐待は、犬や猫がよく見せる行動である。相手が強いとわかると、しばしばを巻いて逃げていくくせに、相手が自分よりも小さくて弱いとわかると、これでもかとはばかりにいじめぬく。表立った攻撃的な行動をとらず、控え目で遠慮がちだと、人からますます馬鹿にされる。最初にかかわれたとき、それを好機に相手に一撃をくらわせておくのがよい。そうすれば、もう二度と攻撃されることもない。十分に反撃できる強い態度こそ、有効な手だてなのだ。このようなケルリンクの考え方に対して、Hergerは、もっと世の現実をふまえた考え方を、寓話を用いて提示する。いつだったか二匹の犬が、一本のうまそうな骨を

取り合いしていた。つぶさに観察していると、よく咬みついて喧嘩早い獐猛な犬の方が、当然ながら終始優勢で、最後にはその骨をせしめた。強い者に対して、見かけ倒しの反抗は、何の役にも立たない。兎に角、自分が強者にならなければならぬ。結局のところ、強い者が勝ちを占めるのだから。多くの経験に裏うちされた Herger の処世術は、ケルリンクの未熟なそれを凌駕する。この現実的な処世訓は、むしろ伝統的秩序を失いかけている現代社会にこそ、ふさわしいものと言える。七行の短い詩節の中に、人生万般に通ずる辛辣な問いかけと、更にその答えさえも用意されている。詩人の緻密な性格が、よくうかがえる詩節である。

Zwên hunde striten umbe ein bein.
dô stuont der bœser unde grein.
waz half in al sîn grînen ?
er muostez bein vermîden.
der ander der truogez
von dem tische hin zer tür :
er stuont ze sîner angesiht und gnuogez.

(MF 28, 6-28, 12)

《二匹の犬が、一本の骨を取りあった。そのとき弱い犬は、四つ足で踏んばって歯をむいた。しかし、歯をむいただけでは、何の役に立ったであろうか。弱い犬は、骨をあきらめなければならなかった。強い犬は、骨を食卓からドアの方へくわえて行った。負け犬に見えるように立ちほだかり、その骨をかじった。》

前の詩節の内容を、更にこの詩節で敷衍する。永い人生においては、どうしても対決しなければならないことがある。その場合、強い者と弱い者

が、一つのをめぐって争っても、弱い者は所詮引込まざるを得ない。この単純な道理に、どれほど多くの人々が涙し、齒がみしてきたことか。弱い者が強い者に対して、どれほど威嚇してみても、それは何の役にも立たない。敵意を見せるだけでは効果はなく、相手につかみかかる程の、激しい闘争姿勢がなければならない。犬の例を引きながら、ケルリンクに人事の忠告を行なった。齒をむいて威嚇することが、効を奏するか否かを十分に考慮すべきである。相手がそれ以上に強い場合には、初めから諦念をもって引き下がるべきである。結局のところ、強い者がしたいようにする。それが世の常であると、仮借なき態度で教える。民主主義が、その芽すら出していない頃思想である。抽象性にあまり依存しない骨太の表現だけに、主張するところに直接的な重みと力が感じられる。

6. 第4 ペンターデ

Er ist gewaltic unde starc,
der ze wihen naht geborn wart.
daz ist der heilige Krist.
jâ lobt in allez daz dir ist,
niwan der tievel eine:
dur sinen grôzen übermuot
sô wart im diu helle ze teile.

(MF 28, 13–28, 19)

《聖夜にお生まれになった方は、権勢大きく力強い方です。その方は、聖なるキリスト様です。まことに悪魔一人を除いて、世にある一切のものは、その方を称讃しています。悪魔には、その大きな思いあがりのために、地獄が与えられたのです。》

第4のペンターデは、MF 28, 13から29, 12までの5詩節から成る宗教詩である。これらの詩節では、人間が自分の生き方に応じて受け取るべき地獄の恐怖や、天国の喜びが描き出される。この宗教的ツィークルスは、キリスト讃美で始まり、悪魔と戦うために聖霊の助けを求める懇願で終わる。特にこの詩節は、聖夜の格言詩と称され、神の御子キリストと悪魔とが、対立的に歌われる。いかにも常識的な内容をうたっている詩で、今日では退屈を感じさせるものであるが、中世のこの当時は、敬虔な気持で聞かれていたことであろう。

In der h lle ist michel unr t.
swer d  heim ete h t,
diu sunne sch net nie s  lieht,
der m ne hilfet in nieht,
noch der liehte sterne.
j  m et in allez daz er siht.
j  w ere er d  ze himel als  gerne.

(MF 28, 20 – 28, 26)

《地獄には多くの災厄がある。そこに故郷をもてば、太陽は地上ほど明るく輝くことはないし、月や明るい星も、その人には役立たぬ。まことに彼の目に見えるものは、すべて彼を苦しめる。まことに彼は、天国へ昇りたいであろうに。》

前節と同様に、詩節の内容は単純明解で、すべて言いふるされたものである。このような歌でも、耳を傾けてくれる聴衆がいたということは、相当地に魅力ある節回しが行なわれたことを意味する。内容は誰にとっても既知の事柄なので、むしろ歌い方の良否が問われた。heim ete, hilfet,

müet の流れるようなメロディー、lieht, nieht, liehte の流動感、そして jâ, jâ の繰り返し。これらの表現は、それぞれ流麗な音楽性が感じられるもので、聴衆の耳にいかにも快く響いたはずである。内容が目新しいものでなくとも、同一音の連続によるこれほど流麗なメロディーがあれば、聴衆も耳をそばだてずにはいられぬ。

In himelriche ein hûs stât :
ein guldin wec dar in gât :
die siule die sint marmelin :
die zieret unser trehtin
mit edelem gesteine.
dâ enkumpt nieman in,
ern si vor allen sünden alsô reine.

(MF 28, 27-28, 33)

《天国に一軒の館が建っている。黄金の道がその館の中へと通じており、円柱は大理石で、それを私達の主は、宝石で飾っておられる。すべての罪に対して、それほど潔白でないのなら、誰もその館の中へは入れぬ。》

ヨハネの黙示録 21, 10 から 21, 27 に至るあたりから、材を採った詩のようだ。神を讃え、正しい生活を送った人は、最後の審判で天国へ迎えられる。そこには神の住まえる王宮が建っており、神によって祝福された人だけが、黄金の道を通してそこに至る。大理石で作られている美しい円柱は、神自らがまばゆいばかりの宝石で装飾を施しているものだ。かくも美しい天国の王宮に召されるのは、一切の罪を犯していない人のみ。現世で大きな罪を犯した者は、天国とは無縁である。絶えず自己を律して正しい生活を送り、心から神を祝福しなければならない。聖職者が日常的に説教

している話を、詩人はあらためて人々に説いて聞かせた。最も一般的な説教の題材は、「天国のすばらしさ」と「地獄の恐ろしさ」である。ここでは、神学的に難解な内容を盛ることなく、きわめて平明な詩にまとめあげている。聴衆の教養のレベルがはかられる詩である。このような単純な詩が敢えて作られたのは、何を歌うかというよりは、どのように歌うかということに、眼目が置かれたからである。この種の宗教詩では、詩人は特にそのような技術を重視しており、聴衆もまた、それを期待するところが大きかった。詩人は、聴衆の耳にたこができるほどの、ごくありふれた材料を用いて、かくも見事に歌える技量を自負している。その得意満面な顔が髭髯とする詩節である。

Swer gerne zuo der kirchen gât
und âne nit dâ stât,
der mac wol fröelichen leben.
dem wirt ze jungest gegeben
der engel gemeine.
wol in, daz er ie wart!
ze himel ist daz leben alsô reine.

(MF 28, 34-29, 5)

《すすんで教会に詣でて、隣人を憎まずにいる人は、確かに心楽しく暮ることができる。その人には最後に、等しく天使が与えられるのだ。このような人がかつて生まれたとは、彼は幸いなるかな。天国では、暮しはかくも清らかである。》

聖職者達は、常日頃から人々に、毎日教会詣でをするようにと説教していた。その説教を題材にして、詩人は格言詩を紡ぎ出した。善男善女の第

一になすべきことは、教会に詣でて神を讃美すること。そして隣人を憎まないことである。そのようにできる人には、だれにでも現世の楽しい生活が約束され、現世から立ち去るときには、だれにでも等しく天使がつかわされる。天使は、神が喜ぶ人々を、必ず神の国へと導いていく。しかしそれとは反対に、神を軽視して教会詣でを怠る人や、幸せそうな隣人を憎む人には、必ず悪魔がすり寄ってくる。悪魔は罪深い人々を、恐ろしい地獄へと導いていく。天使が神の国へと導いていける正しい人が、かつてこの世に生を享けたことは、まことに喜ばしく幸いなことである。天上に召された人の生活は、神の祝福をうけて楽しく、永遠に清らかである。この詩節の終行は、前の詩節の終行と同じく、 *alsô reine* で結ばれている。これが詩人の最も強調したい言葉であった。従って二つの詩節は、詩人が意図して、並べて作ったものと解すべきである。

Ich hân gedienet lange
leider einem manne
der in der helle umbe gât.
der brüevet mine missetât,
sîn lôn der ist böese.
hilf mir, heiliger geist,
deich mich von sîner vancnisse erlœse.

(MF 29, 6-29, 12)

《悲しいことに私は長い間、地獄で悪だくみする奴に奉仕した。私の悪行を吟味する奴は、ひどい報酬をくれたものだ。聖霊様、どうか私を助けて、あいつの牢獄から抜け出させて下さい。》

この詩節も、前の4つの宗教的詩節と同様に、聖職者の説教を題材とし

て、格言詩に結晶させたものである。詩の内容が周知のものであるときは、それがどのような局面で歌われたか、あるいはどのように表現されているかということに、聴衆は一層敏感であった。地獄でいろいろ悪だくみをする奴というのは、言うまでもなく悪魔のことである。私は現世で、いろいろと罪を犯すことによって、長い間悪魔に奉仕してきた。悪魔は、私の罪をそれぞれつぶさに検討吟味して、その種類と程度に応じて分類し、自分の罪科帳に記帳している。最後の審判のときに、悪魔はその罪科帳をもってきて、神の前に開いて見せる。これほどの罪を重ねた極悪人だから、こいつの魂をもらっていくぜとばかりに、悪魔は神の前からその罪人をさらっていく。そして地獄の底に引っぱり込む。地獄に堕ちることが、悪魔に奉仕した報酬である。かくなる上は、聖霊にお願いして助けてもらう以外にない。罪に汚れた者の魂を洗って浄めるのは、聖霊の仕事であり、神のいる天国へと導いていくのは、天使の役目である。悪魔の牢獄と呼ばれる地獄から、なんとかして救い出して下さいと叫ぶその祈りは、全人類救済の祈りに通ずる。初行の *gedient* (<*dienen*) と、5行目の *lôn* は、本来臣下のなすべき忠勤と、君主が臣下に与える報酬を意味する。その関係は、中世のこの当時、「神」と「信者」の間に、更に「騎士」と「貴婦人」の間にも見られた。これは、現代のそれに該当する語の概念よりも、はるかに大きな概念をもつ重要な語である。

7. 第5 ペンターデ

Mich hungerte harte.
ich steic in einen garten.
dâ was obez innen :
des mohte ich niht gewinnen.

daz kom von unheile.

dicke weget ich den ast :

mir wart des obezes nie niht ze teile.

(MF 29, 13-29, 19)

《私はとても腹がすいていた。そこで果樹園に上っていった。そこには果実が実っていた。しかし、果実を手に入れることはできなかった。そうになったのは不運のゆえ。私はしばしば、果樹の太枝を揺すった。しかし果実は、決して私のものにはならなかった。》

第5ベンターデは、MF 29, 13から30, 12までの5詩節から成る。そのうち第1詩節と第5詩節はどちらも、報酬が与えられなかったことに対する激しい驚き、そして深い嘆きを表現している歌で、ツィークルスの本領が明快に発揮された詩節構成をとっている。詩人は施しを激しく欲するが、どこか気に入られないところがあって、どうしてもそれを手に入れることができない。果実をみのらす太枝のように、施しをくれるはずの殿の近辺を揺さぶって、気づかせようとするけれども、全く効果があらわれない。施与にあずかれなかった男の、驚きと嘆きは大きい。禁断の果実を暗示するこの詩節の終りの2行は、裏に何かあると感じさせる表現である。アクチュアルな社会的背景があって歌われたようだが、詳細は一切不明である。

Swâ ein guot boum stât

und zweier hande obez hât,

beidiu süeze unde sûr,

sô sprichet ein sîn nâhgebûr

'wir suln daz obez teilen :

wirt ir einez drunder fûl,
ez bringet uns daz ander ze leide.'

(MF 29, 20 - 29, 26)

《立派な果樹が立っており、甘い果実と酸っぱい果実の二種類がなっている場合、果樹の隣人の一人は言う：「私達は果実を分けるべきだ。それらのうちの一つでも腐れば、それが他の果実を腐らせるから。》

「朱に交われれば赤くなる」の諺と同一の内容を説き、前途有為の青年達に警告を発した詩節である。世評すぐれた立派な殿様であっても、その宮廷には必ずや、善良な下臣と邪悪な下臣とがいるものだ。灯台下暗しの諺にもある通り、殿は身近にいるだけに、かえってその区別をつけ難い。隣人であれば、醒めた目ではっきりと区別できるし、批判的な言葉を口にすることもしやすい。果実が一つ腐ると、そのまわりの果実にも飛び火して、次から次へと果実を腐らせていく。悪貨が良貨を駆逐する如く、前途有為な青年達は、次々に毒されていく。それゆえ、本来与えるべき人に施しをし、媚びへつらうだけの人には施しをすべきではない。悪例を作ると、それが一般化され妥当とされる危険が大きい。正しい立派な人と邪悪な人とを、はじめから別々に分けてかからねばならぬ。この表現の裏には、気前よく分かち与えることをせず、腐ったものでもためこもうとする、吝嗇の殿を非難する気持ちも、全体に見え隠れする。

Swel man ein guot wip hât
und zeiner anderer gât,
der bezeichent daz swîn.
wie möhte ez iemer erger sîn ?
ez lât den lûtern brunnen

und leit sich in den trüeben pfuol.

den site hât vil manic man gewonnen.

(MF 29, 27-29, 33)

《良き妻をめとっていながら、他の女のもとに通う男は、豚さながらである。豚は今後、どのようにしてこれ以上卑しいものになりえようか。豚は清らかな泉を捨ておいて、濁った泥水の中に寝そべる。このようなやり方を、ひじょうに多くの男どもが、習いとして身につけた。》

昨今は、豚同然の卑しい暮らしをする男どもが、余りにも多くなったと、詩人は心から嘆く。guot な妻とは、容貌容姿が美しく、また内面の美質にも優れたものがある妻のことである。そのような立派な妻をもちながら、欲望にかられて他の女のもとにしげしげと通う男どもが、余りにも目につく。このような男は、さながら豚男と言ってよい。bezeichent という語は、寓意的なテキストを解釈するときの技術的な用語である。豚は不潔の象徴として、またこれ以上卑しくなれない最低の動物として、しばしば歌の中によみこまれる。豚が清らかな泉の方を見むきもせず、好んで濁った泥水の中に寝そべるというのは、立派な妻を裏切って、妾と同衾することを言う。ゆとりのある貴族が、好き勝手に女遊びをしている状況を、豚になぞらえて皮肉り、厳しく批判している。先の詩節の sūr na obez が、まさにこの豚男に該当する。

Ein man sol haben êre,
und sol iedoch der sêle
under wilén wesen guot,
daz in dehein sîn übermuot
verleite niht ze verre ;

swenne er urlobes ger,

daz ez im an dem wege niht enwerre.

(MF 29, 34-30, 5)

《人は名誉をもたねばならぬが、時には魂によく尽くすべきである。そうするのは、彼のいかなる傲慢も、彼を余りに遠ざけすぎないようにするためである。彼がこの世から去ることを望む場合に、かの道で差し障りがないようにするためである。》

中世の人々にとって最大の幸福は、最後の審判で天国へと召し上げられることである。天国へ昇ることを望む人は、地上で名誉 (êre) を獲得するばかりでなく、魂 (sêle) も正しく保つようにしなければならない。立派な sêle は、確かに神に喜ばれるからである。良き sêle によって天国に召されることが、最大の幸福である。良き sêle を保つには、財貨 (guot) よりも êre を求めなければならない。しかし、ただ単に êre にとどまってはならない。それは、sêle を立派に磨きあげる礎になるべきである。それでは、sêle を立派なものに仕上げ、長く維持するのは、一体何のためなのか。その目的が、二つの daz 文によって説明される。一つは、傲慢で不遜な心を抱くことによって、神から余りにも遠ざけられることを防ぐため、もう一つは、この世から去っていくときに、天国への道を踏みあやまらないためである。すなわち地獄への道を歩むことが、決してないようにするためである。übermuot は、神を恐れぬ思いあがった心のことであって、中世では七つの大罪のうちの一つに数えられる。ここでは、Lucifer のイメージを感じとることができる。ze verre verlegen とは、神のもとへもどって来れないほどに、大きな罪を犯させることを言う。an dem wege で言われる道は、天国へ行く道筋のことである。素直に天国へ行けるように、sêle を立派なものに磨きあげることを心掛けよ。こ

れは、詩人自身にとっての、自戒の言葉でもある。

Korn sâte ein būman :
do enwolde ez niht ûf gân.
ime erzornete daz :
ein ander jâr er sich vermaz
daz erz en egerde lieze.
er solde ez im gûetliche geben,
der dem ändern umb sin dienst iht gehieze.

(MF 30, 6-30, 12)

《農夫が種をまいた。だがその種は、芽を出そうとしなかった。農夫はそのことに腹を立てた。翌年畑を休閑地にしようとした。奉仕に対して何かを約束してくれる人のために、快く種をまくべきであろうに。》

宮廷から宮廷へと遍歴する吟遊詩人達にとって、殿様からの施与は最大の関心事であった。彼らにとって、施与なしに生きていく術は他になかったからである。そのためにどの宮廷においても、殿様から所望される歌、殿様を称讃する歌を作った。しかし、その称讃に応えて褒美をくれる、物惜しみしない心をもつ殿様と、全然褒美を与えようとしない吝嗇の殿様がいた。この詩節は、後者に対する失望を歌にしたものである。būmanは詩人のこと、kornは殿様を讃える歌を意味している。種は将来、いくつもの穀粒をつける。今殿様をほめておけば、将来それが大きな穂を実らせて、豊かな施与にあずかれる。殿様に気に入ってもらい、たくさんの施与にあずかろうと、詩人は最大の讃辞を惜しまず、殿様を讃美する歌を作った。しかし、せっかくまいた種は、麦の穂を実らすどころか、芽さえ出そうとしない。これほど吝嗇の殿様を讃美した自分の目のくもりを嘆き、芸

術を解さぬ鈍感な殿様に失望を隠せない。その嘆きと失望は、早速怒りへと移行した。怒りにまかせて、詩人は重大な決意をした。畑を休閒地にすると、もはや殿をほめたたえる歌を作らないことを意味する。他の吟遊詩人達は、仕える殿様のもとでたんまりと褒美をもらい、ぬくぬくと暮らしている。奉仕に対して、必ず褒美を約束してくれる心豊かな殿様の方に、当然ながらどの詩人の心もなびいていく。詩人は、今仕えている殿様のもとを去って、他の国の殿様を讃える歌を作ろうと考える。これは、仕える相手、称讃する相手を間違えた自分に対する、失望と警告の詩節である。このツィークルスの第1詩節と、密接な関連のもとに歌われており、両者が結びつくことによってその円環を美しく閉じる。

8. トリアーデ

Krist sich ze marterenne gap,
er lie sich legen in ein grap.
daz tete er dur die goteheit:
dâ mite lôst er die kristenheit
von der heizen helle.
er getuot ez niemer mêr.
dar an gedenke swer sôder welle.

(MF 30, 13–30, 19)

《キリストは、拷問にかけよう自分自身をお預けになり、墓の中に自分を寝かせるようお命じになった。そうなさったのは、神性のためである。そうすることによって、キリスト教徒達を焦熱地獄からお救いになったのだ。このようなことは、今後もう二度となさるまい。かの地へ赴こうと欲する人は、そのことを考えるがよい。》

最後の3詩節、つまり MF 30, 13 から 30, 33 までは、Triade と称される詩節のグループであり、第4ペンターデと同様に、宗教的ツィークルスである。Herger の作品は、このトリアーデによって、最終的に救世主キリストのテーマへと、結論づけられる。この詩節の内容は、俗人でさえ誰もが知っているものである。キリストは、自分を拷問にかけて十字架上で処刑してよいと、罪ある人々に自分自身を委ねる。そして処刑の後には、自分の遺体を墓の中に埋葬させる。そのあとの復活によって、神の力の偉大さを人々に示すためである。キリストは、焦熱地獄に堕ちて当然の罪深い人々の犠牲となり、慈悲深く人類を救済するために、自分の処刑と埋葬を命じた。しかし、これから後は決して、自分自身を犠牲にして救済を行なうことはしない。それゆえ、十字架の処刑以後に犯した人々の罪業については、もはや救済は行なわれぬ。もし神の住んでいる天国へ、真剣に昇ろうと望む人がいるのなら、その人はキリストの再度の救済がないことを、厳粛に受けとめなければならぬ。地獄へ堕ちたくない人は、二度と罪を犯してはならぬ。キリスト受難の日を記念する、聖金曜日 (Karfreitag) に関係する詩節である。

An dem österlichen tage
dô stuont sich Krist ûz dem grabe.
kûnec aller keiser,
vater aller weisen
sîn hantgetât erlôste.
in die helle schein ein licht:
dô kom er sînen kinden ze trôste.

(MF 30, 20 - 30, 26)

《復活祭のこの日に、キリストは墓から復活なされた。すべての皇帝達の

王、すべてのみなし児の父は、自らの手がお創りになったものを救済なさった。地獄の中へと、一条の光が射し込んだ。するとキリストは、自分の子供らの慰めとなるために降りて来られた。》

復活祭の意義を、あらためて聴衆に説き明かす詩節である。前の詩節のキリスト受難を受けている。人々が深い信仰心をもたず、マンネリ化して祝う復活祭。しかしキリストは、まさにこの日に復活した。神に代わって、地上の秩序を実現し維持するようにと、代々の皇帝に権能を授けた。それゆえ神は、すべての皇帝を支配する最高位の王と言える。人々は皆罪を犯すことによって、神から次第に遠く離れていく。神に見放され、孤独になった魂をもつがゆえに、神のみなし児である、その孤児達皆に、常に慈悲をかけようとする神は、みなし児達の父と言える。神は自らの手で、アダムとイブを創り、更にこの世のすべての人々を創り出した。自らが創り出したものゆえ、すべての人間をひとたびは救済せざるを得なかった。神は、地獄に堕ちていく人々を救うために、地獄を明るく照らす。射し込む光を目にした罪人らは、自分の大きな深い罪を悔い改め、神のもとに集まろうと精進する。真に神の子になろうと欲する人々に、確かな慰めを与えるために、つまり人々を地獄から天国へと召し上げるために、神自身が地獄まで降りて来た。このように語る詩人も、自らの罪を自覚し悔い改めて、もうすでに神の子になっている。

Wurze des waldes
und grieze des goldes
und elliu apgründe
diu sint dir, hêrre, in künde:
diu stênt in dîner hende.

allez himeleschez her

daz enmöht dich niht volloben an ein ende.

(MF 30, 27-30, 33)

《森の草木、砂金、すべての地底。主よ、これらはあなたの御存知のもの。あなたの御手の中にあるのです。天上のすべての軍勢でも、あなたを称讃し尽くすことはできないでしょうに。》

神の全能を称讃する詩節である。神を讃えるとき、まず地上の被造物から始めるのが常道。そののち、地中から地底へと移っていく。森を見れば、多種多様の樹木がうっそうと茂り、草花は、どの芸術家の技量も足元に及ばぬくらい、見事に咲き乱れている。地が削られてできた川床や、山奥の鉱脈には、砂金がキラキラと輝きを放っている。更に深い地の底は真暗闇で、人の目の決して届かぬ所。まるで天地創造を想起させる表現である。地上も地中も地底も、すべて神が創り出したものゆえ、神の知識の中に納まっている。一切が神の支配下にある。天上には、地上に勢威を示すための軍勢が控えている。いろいろな楽器を打ちならして、にぎやかに天の威光を讃えるための軍勢である。しかし、彼らが寄ってたかって皆で、神の偉大さをどれほど讃美しようとも、ほめ尽くせるものではない。視覚的なものから聴覚的なものへと移行させて、神の偉大さが超越的であることを強調している。キリスト受難から復活、神の全能へと結んでいくこれら3つの詩節は、Waltherに迫るほどの詩人の卓越した技量によって、密度の濃い、統一の力の強いトリアーデを形成している。

9. 問題となる詩節

[Güsse schadet dem brunnen :

sam tuot dem rifen sunne :
sam tuot dem stoube der regen.
armuot hœnet den degen :
sô schadet ouch dem jungen man,
wil er ze vil gehalten.
triuwe unde wiser rât
daz zieret wol den alten.]

(MF 30, 34-31, 6)

《洪水は泉に被害を与える。太陽は霜に同じことをする。雨もほこりに同じことをする。貧乏は勇士をあざける。だからといって若者が余りにたくさんためこもうとすれば、それも若者に被害を与える。誠実と賢明なる忠告は、老人を見事に飾る。》

格言詩の原型とも言うべき、古色蒼然たる歌である。たくさんの雨が降って泉の縁を破ると、その美しい形が損なわれ、清水をたたえていた泉が濁る。反対に、太陽の日射しが強いと、霜を早く溶かす。雨が降れば、ほこりを流し去る。悪天候も好天候も、ともに害を及ぼすことがある。つまり、どんなものでも、それと反対のものと同様に、害を及ぼすことがあることを説いている。勇士は貧乏だと、錆びた鎧冑によれよれの帷子を身につけることになる。これでは士気も萎えてしまって、人々の嘲りの的になるだけだ。だから貧乏は嫌だと言って、若者が吝嗇の心を育み、若いうちから金の亡者になって、あまりにたくさんためこもうとするなら、人々から尊敬されず、従って名誉も得られない。貧乏も、その反対の貯蓄のしすぎも、ともに人の心に害を及ぼす。ここまでは、視覚的なものや外面的なものが例に挙げられる。しかし終りの二行では一転して、心で感ずべきもの、内面的なものに目が向けられる。誠実と賢明なる忠告は、中世のこ

の当時の大きな美德であるから、害を及ぼすことはありえない。それゆえ、schaden という動詞と結ばれることができない。しかもそれらは、経験未熟な若者とは関係がうすい。そこで詩人は、zieren という動詞と組み合わせ、しかも飾る対象を老人にした。この詩節は、その構成、用語、詩想などの点で、これまで見てきた Herger の詩群より、もっと古風な感じを与える。それゆえ、他の詩人の作であるとも考えられている。この詩節だけを [] に入れた編集者の意図は、そこにある。

10. 詩人の影響

以上考察してきた Herger の詩は、殿様を称讃する歌と誹謗する歌、遍歴歌人の窮状と援助を訴える歌、動物寓話からの教訓の歌、暮らしの掟を教える歌、宗教詩等、いくつものレパートリーを有している。これらのテーマの扱い方や構造から推して、彼の格言詩は、1150 年以前の前文学的と言うべき格言詩に遡ることができる。詩の素材を聖書から採って、民衆語による宗教詩に作りあげたものや、諺や寓話の権威を用いて、格言詩の信頼性を高めたものが少なくないところからも、大きな時代的遡及性を認めてよい。この詩人の作品は、ドイツ語で書かれたものの中では、当時としては相当に高いレベルにあったと思われる。後世の天才詩人 Walther von der Vogelweide の格言詩とは、比べるべくもないが、Herger 以前の Kürenberc らの叙情詩人、およびそれ以前の詩人達の作品を前提にしてみれば、そこからどれほど重要な進歩をとげたかが、極めて明瞭になる。そのような評価の方法によれば、Herger の詩の価値は、頗る大きいと認識せざるを得ない。それゆえにこそ、写本 A と写本 C がともに、彼の作品を採録したのである。この詩人と作品が、後世のどの詩人にどのような影響を与えたか。たとえば Freidank の格言詩に、

Herger の影響が少なからず感じられるが、それがどのような影響なのか。このような彼の影響史については、これからの綿密な研究にまたなければならない。

Text および参照した文献：

1. Text: Des Minnesangs Frühling. Nach Karl Lachmann, Moriz Haupt und Friedrich Vogt. Neu bearbeitet von Carl von Kraus. 1944. Leipzig.
2. Des Minnesangs Frühling. Unter Benutzung der Ausgaben von Karl Lachmann und Moriz Haupt, Friedrich Vogt und Carl von Kraus. Bearbeitet von Hugo Moser und Helmut Tervooren. Stuttgart.
I Texte. 37 Auflage. 1982.
II Editionsprinzipien, Melodien, Handschriften, Erläuterungen. 1977.
III/1 Kommentare. Untersuchungen von Carl von Kraus. 1981.
III/2 Kommentare. Anmerkungen. 1981.
3. Helmut de Boor (Hrsg.): Die Deutsche Literatur vom Mittelalter bis zum 20. Jahrhundert. Texte und Zeugnisse. München.
Band I/1, I/2 : Mittelalter. 1988.
4. Werner Höver/ Eva Kiepe (Hrsg.): Epochen der deutschen Lyrik.
Band 1: Gedichte von den Anfängen bis 1300. München. 1978.
5. Helmut de Boor: Geschichte der deutschen Literatur.
Band 2: Die Höfische Literatur, 1170 – 1250. München. 1953.